

遊戯が有する教育的機能に関する一考察

木下 茂 昭

Shigeaki KINOSHITA

1. 緒 言

遊戯は、元来、子供たちの生活の中に深く根ざしているものであり、また、子供たちの生活の中心となってきたものである。²³⁾しかし、高度経済成長後、社会全体に、生活環境の著しい変化や価値観の多様化など社会構造の変化が起こってきた。そして、このような変化は社会の構成員である子供たちの生活にまで多大な影響を及ぼすこととなった。その結果、子供たちの生活の中心であった遊戯が、それまで考えられていたような遊戯とは異質のものとなり、遊戯の形態や意味づけが大きく変化してきてしまったことなどが揚げられる。また、子供たちの生活様式にも変化がみられるようになってきた。そして、子供たちの遊戯を含む生活全体の変化について指摘する著名人が多くみられるようになってきている。その中で、遊戯については、たとえば、現代の子供の遊戯が量的・質的に乏しいものになってきているということ³⁾や、また、子供の世界から群れ型の遊びが失われ、ギャング集団が解体してきていること、⁴⁾あるいは子供たちの体力が低下してきていること¹²⁾などをさまざまな観点から指摘している。そして、子供たちの生活様式の変化は、現在においても多くみられる現象であり、いまだに増加傾向を示している。

また、子供たちの生活は、個別化してきており、生活の形態がさまざまなものとなってきている。幼稚園・学校から帰宅し、休む間もなく、塾やお稽古ごとに通うという子供たちがよくみられる。このような傾向は、遊戯が、子供たちの生活から追いやられ、失われようとしていることを意味しているといえる。そのうえ、子供たちの生活は、時間に追われ、課題に追われ、時間に拘束されるようになってきて

いる。¹⁰⁾そのため、子供たちが本来持っているべきはずの快活さや自由性までを損なうようになってきているともいうことができる。

子供たちの親は、子供たちの早期教育を企業にまかせ、あるいはテレビやビデオを見せておくというようなことをし、自分の負担を軽くする方法で、自分自身の時間を造り出そうとする傾向さえみられる。

しかし、このような子供たちを取り巻く環境に対して、遊戯の価値を認めている研究者からは、子供たちの生活の中に、早期教育をするよりも、集団での遊びなどを多く取り入れる必要があることなどが指摘されている。⁴⁾また、教育に関する著作の中にも、あるいは随筆などにおいても、子供たちの遊戯の必要性について述べているものも数多くみられる。古くは教育の道標として、多くの教育者が参考にしたといわれているルソー (J.J.Rousseau) 著作の文学的教育書である「エミール」の中にも遊戯の価値についてふれている部分もみられる。たとえば、

「子供は思うままに跳びはね、駆けまわり、大声をあげなければならない。彼らのあらゆる運動は強くなろうとする体の構造の必要から生まれてくるのだ。」¹⁹⁾

と述べている。その他にも、遊戯の必要性について指摘している部分も多くみられる。

このように古くから、遊戯の必要性について認められているにもかかわらず、現在の我が国における子供たち遊戯は、多様化し、また、変質してしまっている。

本来、遊戯という行為は、遊戯それ自体に独特の性質を有していたものである。たとえば、幼児の生活はその言動からも明らかなように遊びそのものである。そのため、遊ぶことによって、身体も精神も

発育・発達しており、遊びから離脱して子供たちの生活や発達を考えることは不可能なことである。また、遊びと勉強や仕事が分離している生徒や学生、社会人にとっても、遊びが健康や体力増強の手段として役立つというばかりではなく、遊びは楽しいものであり、それ自体が生活の目的となり得るものであるし、人間が生きていくための本質的な意味を持つものである。

そこで本研究では、上述したように人間にとって重要な意味を有している遊戯に内在している教育的機能について、特に幼少期の子供たちへの教育的機能について考察することを目的とした。

2. 本研究の目的・方法

本研究の目的は、人間が生まれてから成長していく過程で、だれしものが経験をするさまざまな遊戯の教育的機能について明らかにすることである。

本研究は、いわゆる文献研究であり、まずはじめに遊戯が有する価値について、文献調査を行った。そして、遊戯が有する価値を明らかにし、そこから遊戯の教育的機能の考察を行った。

なお、本論でいう遊戯とは、遊びと戯れの両方の意味を含んでおり、文中では分脈によって、「遊戯」と「遊び」を使い分けている。しかし、本研究でいう「遊戯」、「遊び」とは、幼稚園などで行われている「お遊戯」とは別のものである。

3. 本 論

1960年代以降、高度経済成長の余波をうけて、自然環境が破壊され、減少し、また、社会構造も大きく変化してきている。このような状況は子供たちの生活にも多大な影響を与えている。たとえば、出生率の低下により一人子が増加し、子供たちが集団で遊ぶ、いわゆる、群れ型の遊びがみられなくなっていることや、一人遊びをする子供が増加していることなどがみられる。

また、幼児を対象とした学習塾やスイミングスクール（ベビースイミング、幼児スイミングなど）や体操教室などのスポーツクラブが数多く見られるようになってきたのも、高度経済成長の頃からである。⁸⁾¹⁰⁾その後、このような学習塾やスポーツクラブ

は多様化し、かつ増加の傾向にあり、それに通う子どもたちも多くなってきている。

このような傾向は、子供たちの健全な心身の発育や発達について考えることよりも、高度経済成長後の高学歴社会にいかにして対応した子供を育てていくかということに子育ての中心がおかれているために起こったことと考えられよう。

3. 1. 幼児の生活の現状

高度経済成長の余波をうけて、国民の社会生活は、それまでの生活とは大きく変化してきた。道路は整備・拡張され、空き地はなくなり、自然環境も破壊され、減少してしまっている。また、国民の意識も大きく変化してきている。このような状況は子供たちの生活にも大きな影響を与えている。たとえば、子供たちが遊ぶ姿があまり見られなくなったことや、日没後、学習塾などから家路を急ぐ姿が多くみられるようになってきたことなどが上げられる。また、子供たちの生活が個別化してきているため、群れ型の遊びがみられなくなっていることや、家の中で一人遊びをする子供が増加してきていることなどもみられる。

これらのことは、遊び場の減少、遊ぶ時間の減少、遊びの多様化や生活様式の変化などによって、子供たちにも、もたらされたことといえる。そのため、集団で遊ぶことが困難となり、個別的な遊びが子供たちの中に浸透してきたと考えられる。⁹⁾そして、科学技術の進歩、特に、高度情報化社会となった今日、子供たちの身の回りにはコンピュータなどの機器が氾濫したために、この傾向はさらに強まったと考えられる。²²⁾

また、高度経済成長は、各家庭に経済的なゆとりをもたらし、さらに、高学歴社会が現実のものとして捉えなくてはならないことをもたらすこととなった。その結果として、子供を持つ親は、子供たちを高学歴社会に対応させるべく、幼児期から知育教育に力を入れることを第一に考えるようになってきたといえる。そのため、幼児教育を担う幼稚園や保育園においても、知育教育に力を入れ、系統的教育を実施して、子供たちを遊戯から遠ざけている傾向さえみられる。いいかえれば、早期教育、あるいは詰め込み教育を行っているともいえ、この傾向

は私立幼稚園に多くみられる。

教育というと、それは頭脳を強化することだけを想像する人々が多くみられる。しかし、教育現場に目を向ければ、教育する以前のさまざまな問題が生じているのも事実である。それは、十分な人間形成ができていないことに起因していると考えられる。このことは、精神的に成長していない子供たちが、学歴社会の影響を受けて、幼児期から知育偏重の教育を受けていることによると考えられる。

また、核家族化が進行してきており、出生率も低下してきているため、一人子の家庭が増加してきている。そして、親たちはその一人の子供に全力を傾けて育て、高学歴社会に対応するべく早期教育に取り入れてしまうという傾向が多くみられる。さらに、マンションなどの集合住宅に居住することなどにより、隣近所の同年令の子供たちにも恵まれることも少なく、異年齢の子供たちと形成する縦型社会を形成することも少なくなっている。そのため、集団で遊ぶことができない子供や自己中心的な子供が増加してきてしまったのも事実である。このようなことにより、子供たち同士の関わりが少なくなっている。遊びの伝承をも困難にしている。

幼児教育において最も大切に考えられなくてはならないことは、人間性を豊かに育てることにある。いいかえれば、知育よりも人間形成が中心に行われなくてはならないということにある。しかし、前述したような理由から、遊戯が不足して、人間形成が不十分な子供たちが多くみられる。十分な人間形成がなされていない子供たちが増加し、就学した結果が、昭和50年代後半からみられるようになった「いじめ」という問題を生むに至ったといっても過言ではない。また、遊ぶことが少なくなったために子供たちの身体にも変化が現れるようになり、骨折する子供などが増加したということも事実である。¹⁴⁾¹⁷⁾

さらに、幼児期の遊戯の不足により人間性の育成や体力の増強が十分になされていないため、¹³⁾子供たちの生活にはさまざまな問題点が表出している。たとえば、コンピュータで一人で遊び、友人と関わらない子供、²²⁾夜ふかしをして朝食を食べない子供、ゴロゴロしている子供、などさまざまである。¹⁰⁾また、家の中でしか遊べない、あるいは一人でしか遊べないなどの遊びの偏りもみられる。これら

は、現代の子供たちの危機的な様相を表しているといえる。このようなことの問題点は、子供たちの生活への意欲が感じられないことや子供らしさが認められない点にある。

以上述べてきたことから子供たちの生活の中から遊戯が少なくなってきた原因は以下のように考えられる。

- 1) 遊びへの欲求を持ちながらも、塾やお稽古ごとなど遊戯以外のことをしなくてはならないことにより、遊ぶための時間がないこと
- 2) 遊びたいけれども遊ぶための場所が十分でないこと
- 3) 遊ぶ友人がいないなど、遊び相手がいないこと
- 4) 遊び方を知らないし、遊ぶための遊具や玩具がないこと

以上の4点である。そして、これらの理由から、遊戯が不足しているために、子供たちの人間形成や体力の増強といった側面が十分に行われなくなっていると考えられる。

3. 2. 遊戯の本質

子供たちの生活の現状については上述したとおりであるが、子供たちを遊ばせることの意味を考えるために、遊戯の本質について考察していく必要がある。

遊戯は人間にとって、喜びであり、また、快楽の一つでもある。このことは、生活の中心が遊戯となっている子供たちだけでなく、仕事を中心の大人にとっても同様なことがいえる。しかし、大人にとっての遊戯と、子供にとってのそれでは、必然的にその意味づけが大きく異なるものである。⁷⁾¹²⁾

大人にとっての遊戯は、日常生活のストレスを発散させるものであり、また、真面目な部分にあたる仕事に熱中するための気分転換的な意味を持つといえる。そのため、遊ぶことそれ自体に目的がある。¹⁾²⁾したがって、その形態は多様化しており、身体活動を伴うものでも、また、大筋群を使用しない身体活動でも、大人にとっては遊戯になり得る。しかし、子供にとっての遊戯は、自由な気ままな活動そのものであることから、身体を活用するものが多くみられるし、子供たちにとっては、静かに動かないでい

ることはかえって苦痛となってしまうことさえある。子供たちが身体活動を伴う遊戯を一人で行っていると大人の目には不自然なものと写ることがあるが、子供たちが集団で遊ぶ姿をみるとほほえましくさえ見える。これは、幼児期にある子供たちの遊戯が集団で行われることの方が一般的であるという考え方が定着しているからであろう。

遊戯は、本来、自由な時間に行われる自由な活動である。⁷⁾したがって、行ってもよいし、行われなくてもよいものであるし、途中で中止することも延期することも可能なものである。これらの条件が満たされなくなった時に、その行動は遊戯とはいえなくなるものである。また、遊戯は、日常生活から遊離したものであり、利害関係がないものといえる。したがって、遊戯は何か外的な目的のために行われるものではなく、遊戯すること、それ自体の中に目的が見いだされるものである。その目的とは、あくまでも純粋であり、遊戯に内在する楽しさを純粋に満喫することである。幼児の遊戯とは、本来、このようなものである。そのため、子供たちは遊戯に熱心であり、真剣に遊戯に取り組んでいくものである。

また、どのような遊戯にもルールという秩序がみられる。²⁷⁾このルールはその遊戯においては絶対的な拘束力を持ち、このルールが無視されたりしたときに遊戯は崩壊するものである。

さらに、遊戯というものは、何かイメージを心の中で操ることから始まるものである。遊戯には、想像、イメージ、あるいはファンタジーともいうべき夢が存在している。⁷⁾大人の遊戯にも、子供の遊戯にも夢があるが、子供の遊戯の方により多くの夢が認められる。これは、子供たちにはさまざまな経験の蓄積が少ないために、何をするにも空想力を用いて取り組まなくてはならないためである。それは、遊戯が、架空のものであり、空想・虚構の世界のものだからであろう。このような遊戯だからこそ、子供たちの遊戯のなかでは、実社会では実現不可能なことも可能なこととなり得るものがあるといえる。遊戯をすることにより、子供たちは自分の夢をかなえ、遊戯の中で自己実現をすることが可能となる。そのため、夢は子供たちが遊戯をするための根元的なエネルギーになり得るといえよう。遊戯の楽しさに魅せられて真面目に夢中で遊んでいると、そこにまた新しい夢が生まれることがある。そして、それ

を実現できればさらに楽しい遊びができるであろうと考え、子供たちはいつそう真面目に遊びに取り組むことになる。²¹⁾このようなことから、子供たちは遊びに真面目に、かつ真剣に取り組んでいるものであるということが理解できよう。

子供たちは年齢とともに身体的に、また、精神的にも成長するのと同様に、年齢とともに遊戯も多様化し、高次元のものへと変化していくものである。まず、子供たちの遊戯は、乳児期にみられる「機能的遊戯」から出発することになる。機能的遊戯とは、手や足をバタバタさせたり、それにより大きな声（たとえば、キャッキャッなど）をだして、喜ぶものがそれにあたる。その後、「ごっこ遊び」、「構成遊戯」、そして、「ルールのある遊び」へと変化していくものである。⁶⁾いいかえれば、「一人遊び」から「平行遊び」、「連合遊び」、「組織的な遊び」へと発展していくことである。

以上、述べてきたことから、遊びの本質は、

- 1) 遊びの目的が遊びそれ自体に内在するため、目的が純粋であること
- 2) 遊びに取り組む態度が真剣で、真面目であること
- 3) 遊びのためのエネルギーは、夢から生まれること
- 4) 遊びには発達があること
- 5) 遊びには発展があること

ということができよう。

3. 3. 遊戯の価値

遊戯の本質をふまえて、遊戯の価値について考えてみると、以下の5点が考えられよう。

すなわち、

- 1) 社会性を発達させること
- 2) 身体的・運動的な機能を発達させること
- 3) 知的側面を発達・育成させること
- 4) 創造性を育成すること
- 5) 情緒の安定を保つこと

である。¹¹⁾¹⁵⁾

遊戯の中で社会性を発達させるということは、特に集団で遊ぶことを通して、子供たち同士触れ合うことにより、人間として守らなくてはならないマナーや弱いものへの優しさなど、人間関係の在り方を

身につけていくことができる。¹⁹⁾また、集団の中での個人の責任性ということについても学習していくことになる。これらは、社会生活をしていく上で必要な事項であり、それらが遊戯をすることによって、無意識のうちに身につけていくということが考えられる。

集団での遊び、個人での遊びを問わず、遊びの中で、子供たちが走り回ってみたり、あるいは跳びはねたりというようなさまざまな活動が、身体諸機能、体力、および運動能力などの発達を促してくれるということは容易に理解できよう。

また、遊戯の中には、数を数えなくてはならないものや、言葉を覚えなくてはならないものなどがある。このような遊びにより、子供たちが特別意識することなく、知的側面の発達が助長されることになる。また、遊びの中で、さまざまなことを工夫したり、遊びに必要なものを造り出したり、というような創造性やイマジネーションなどの発達が促されることになる。

さらに、遊戯は子供たちの日常生活の中で生じたさまざまなストレスによる精神的緊張を緩和したり、開放してくれる機会を提供してくれる。そのため、社会的に不適応になることを防ぐことにもなり得るし、不適応に陥った人間を治療することにも役立つものである。

以上述べてきたような価値が遊戯には認められる。

3. 4. ルソーにみる教育的機能としての遊戯

ルソーは教育の内容が子供たちの発達段階によって規定されるべきであること指摘している。²⁰⁾その指摘によれば、幼年期には身体の発育・発達に重点がおかれ、また、少年期には感覚器官を発達させるためのさまざまな訓練が必要であるとしている。そして、幼年期・少年期のいずれにも遊戯を行わせることにより、各々の年代で育成されるべき内容が、十分に育成されると考えられており、そこに遊戯の価値を見いだしているといえる。

ルソーの考え方は、いわゆる自然主義学派に属するとされている。²⁴⁾しかし、ルソーの説く自然という概念は、その概念の矛盾性と多様性により一義的に捉えることは困難であるが、おおよそ次の3点にまとめることが可能であろう。それらは①神学的意味

における自然、②自然的意味の自然、③心理学的な意味の自然、もしくは主観的な自然概念、である。¹⁹⁾²⁵⁾ルソーが考えていた自然はこれらの3点にまとめることができるが、「エミール」をみるかぎり、各々が独立してしているものではなく、複雑に交錯して考えられているといえる。

このような自然観を持つルソーの述べる教育の目的は、社会の中に生きている自然人を育成することにある。その自然人を育成するとは、いったいどのような人間を育成するのかということ、ルソーの言葉を引用するならば、以下のようなになる。すなわち、

「自然人を作るというのは、けっして野蛮人を作って森にかえすことを意味するものではない。ただ社会の渦巻の中に閉じこめられていて、しかも人間の情欲と意見とによって社会に束縛されないような人間を作り、自分の眼で見、自分の感情で感じ、また自分の理性以外に何の権威をも認めないような人間を作ろうとするのである。」¹⁹⁾

ということになる。いかえれば、真の意味での人間を作ることであり、ルソーのいう自然人とは、何よりもまず相対的な社会人とは異なり、絶対的な存在としての人間を意味している。このことから、ルソーの名言である「自然に還れ」という言葉は、我自身に復帰することを意味していると考えられる。

ルソー教育論の特色は、教育目的達成のために自然が教える道に従って教育を行うという自然主義にある。そして、その教育の特色の一つとしては、教育が、人間、事物、自然の三者によって与えられるものであるわけであるが、人間と事物の教育とを自然の教育の方に導いていかななくてはならないものであるとしていることが揚げられる。第二には、外的な事物の抵抗を利用し、子供に自然の力を感じさせることにより、子供を導いていこうとする点である。¹⁹⁾このことは、人間の自然性を社会の悪影響から遠ざけて純粋に発展させて、子供たちの心身の発達を保護していくということにつながる。

第三には、上述の2つの特色が、子供たちの自由にまかせて行われることであり、子供たち自らに実行させることである。これは子供たちの自由と自発的活動を強調しているルソーの根底を支える考え方であり、それに関連し、実物教育と経験による教育の重要性をも指摘をしている。¹⁹⁾

このようなことからルソーの教育に対する考え方

は、子供たちにさまざまな事柄を教え込むというのではなく、自然の中で行われる子供たち自身のさまざまな行為により、学習がなされていくというものであったと考えられる。そして、子供たちの行う行為とは遊びそのものであり、遊びを通して、さまざまなことを経験し、学習が達成されるものであると考えていたのである。いいかえれば、遊戯を通して教育するといえ、遊戯を教育の一つの方法として機能させることを考えていたといえる。

また、「エミール」の中には、

「考えることを学ぶためには、したがって私たちの知性の道具である手足や感官を鍛錬しなくてはならない。 ～中略～

魂を強くするためには筋肉を強くしなければならない。」¹⁹⁾

と述べてあり、知育・徳育の手段として身体を動かす運動の必要性を指摘している。そして、遊戯の必要性については、

「子供の時代はすべてが遊戯とたわいない楽しみにすぎないのだから、あるいはそうあるべきだから」¹⁹⁾

と指摘している。これらのことから、子供らしい遊戯を通して身体を鍛えることが、知性や精神の発達に役立つということがいえよう。このことは、「教育上における幼年期の遠回りが、やがてかえって最後の勝利を占めるべき間道」¹⁹⁾であることから、理解できよう。

以上述べてきたように、ルソーは自然主義の立場から遊戯の価値について述べ、また、鍛錬主義の立場から、知性・精神の発達を助長するための手段として遊戯の教育的機能を認め、言及しているといえる。

3. 5. 遊戯の教育的機能

古くから認められている遊戯の教育的機能は、ルソーの指摘だけでなくその他の研究者によっても認められてきている。¹⁾²⁰⁾

遊戯に見られる教育的機能は、遊戯の価値と密接な関係があるといえる。というのは、遊戯の目的が遊戯それ自体に内在しているためであり、遊戯をすることにより、いかなる富も、名声も得ることができないためである。しかし、遊戯をすることにより、

人間として人間らしく生きていくために必要なさまざまな事柄や事象が子供たちの身につき、将来の生活に生かされていくことになることも事実である。このように考えてくると遊戯の教育的機能について一言で表現するならば、「人間が人間らしく生きていくための人間形成をする」⁹⁾²¹⁾ということにあるということができよう。そして、この包括的機能を達成するための具体的な機能としては、まず、「人間として生きていくために必要な精神を作り上げること」、第2に、「人間として生きていくために必要な身体・機能を作り上げること」、そして第3には「人間として生きていくために必要な知識を身につけるための基礎・基盤を作り上げること」ということができよう。

「人間として人間らしく生きる」ということは、物質を他の人よりもたくさん手に入れるということではなく、精神的にどれだけ豊かな状態でいられるかということにある。そのためには、自分自身と個性・性格を異にし、価値観を異にし、生活環境・生育歴を異にする人々とどれだけ知り合い、接するかということが大きな問題となる。自分自身とは異なる人間と出会うことにより、その相手から考え方や自分自身が今までに知らない事象などさまざまなものを学習し、身につけ、精神を高めていくことになる。子供たちにとって、このような自己変革をする機会を与えてくれるという機能を有しているものが遊戯なのである。

他の子供たちと関わる遊戯とは、集団で遊ぶ形態をとることになる。その集団は、同年齢の子供たちだけでなく、異年齢の子供たちも含まれるものである。そのような集団を通して、同年齢の子供たちとのつきあい方だけでなく、異年齢の子供たちとの接し方についても学習していくことになる。¹⁷⁾平等で、自由に競争や協力ができる同年齢の子供たちと接することを経験し、自己について再認識することになる。そして、その中で、自分自身の生き方を作り上げていくことが可能となり得る。また、異年齢の子供たちと接することにより、年上の人との接し方、あるいは年下の子供たちとの接し方の基礎を築くことになる。そして、自分にはできないことをする子供たちを見て刺激を受けて、自分自身を高めるように努力をすることになる。また、一人遊びでないために、そこには自分勝手な行動は許されず、他の子

供たちと関わっていくことになる。その中で、我慢を覚え、自己中心的な態度を表出しないような人間に形成されていくものである。このようにして、子供たちの精神は、形成され、鍛えられていくことになる。

遊戯の中には、屋内で行われるもの、屋外で行われるものなどさまざまな形態をとるものである。これら両者の遊戯とも、身体を用いたり、身体・機能などを用いたりして行われる。そのため、子供たちの身体・機能は遊戯の中で、鍛錬されることになる。年上の子供の活動を見て、自分自身もできるようになりたいと考え、辛くてもできるようになるまで、努力をすることを身につける。

また、遊戯をしていく中で、子供たちは未知の物事に直面することがある。そして、自分なりの解決法・解決策を考えたりすることになる。また、今まで知らなかった事象を知り、それらを経験することにより、将来の生活に役立てることができるようになる。机上論よりも、経験から生まれた論の方が将来の生活には役立つことが多くみられるし、人間として生きていくためには有効となることのほうが多くみられる。

さらに、遊戯は文化を創造していくための基礎を作ることが可能であろう。どのような文化であれ、それを作り上げるためにはさまざまな知識が必要になってくる。この知識は系統的にしっかりと整備された教育の場面で行われることになる。しかし、教育の場面には文化を創造していくために必要な根元的エネルギーは見つけることができない。それは、教育が知識を身につけるために行われるべきものだからである。しかし、遊戯には文化を創造していくために必要な根元的エネルギーが存在すると考えられる。というのは、遊戯には前述したように子供たちがみる「夢」が存在するためである。子供たちが遊戯の中で、「～してみたい」とか「～できるようになりたい」と考えていることこそ「夢」であり、あこがれというような願望である。人間が何かを発明したり、何かを造り上げる時の支えとなってくれるものがこの「夢」であるといえるからである。²¹⁾

子供たちが、学校において教育を受けていくためには、知性や精神が十分に作り上げられていなくてはならない。知性がなくては、知識を身につけようとしてもなかなか身につけることができないもので

ある。すなわち、人間として生きていくための資質を身につけておかななくては、教育を受けても無意味となってしまう。したがって、教育を受ける以前に、十分に遊戯をして、教育を受けるための知性・精神を築き上げておくことが大切となる。以上述べてきたように、遊戯の教育的機能は「人間が人間らしく生きていくための人間形成をする」ということにあると考えられる。

4. 結 語

子供たちが生活の中心としてきた遊戯は、現在においても子供たちにとっては必要なものである。その理由としては、遊戯の価値が、

- 1) 社会性を発達させること、
- 2) 身体的・運動的な機能を発達させること、
- 3) 知的側面を育成させること、
- 4) 創造性を育成すること、
- 5) 情緒の安定を保つこと、

という点に認められるためである。このような価値を有する遊戯が持つ教育的機能は、「人間が人間らしく生きていくための人間形成をする」ということにある。この機能を達成するためには、まず、「人間として生きていくために必要な精神を作り上げること」、第2に、「人間として生きていくために必要な身体・機能を作り上げること」、そして第3には「人間として生きていくために必要な知識を身につけるための基礎・基盤を作り上げること」ということが考えられる。

子供をより人間らしく育て、人間らしく生活をさせようとするならば、また、高学歴社会の中で生活をしていくために高等教育を受けさせようとするならば、さらに、子供たちの真の幸せを願うのであれば、子供たちの幼少期の間に、今以上に遊びを行わせることが必要であろう。

5. 参考・引用文献

- 1) アンリオ, J., (佐藤信夫訳), 遊び, 第2版, 白水社, 1982. Pp. 196.
- 2) エリス, M. J., (大塚忠剛 他訳), 人間はなぜ遊ぶか, 第6版, 黎明書房, 1980. Pp. 272.
- 3) 深谷昌志, 「『巣籠り』状況の中の子どもたち」,

- 体育の科学, 30-2:91-95, 1980.
- 4) 深谷昌志, 「遊びと教育との相克」, 体育科教育, 34-2:9, 1986.
 - 5) フレーベル, F. W. A., (岩崎次男訳), 幼児教育論, 明治図書, 1972. Pp. 241.
 - 6) ガーヴェイ, C., (高橋たまき訳), 「ごっこ」の構造, サイエンス社, 1980. Pp. 218.
 - 7) ホイジンガー, J., (高橋英雄訳), ホモ・ルーデンス 人類文化と遊び, 第11版, 中央公論社, 1970. Pp. 386.
 - 8) 飯塚邦明, 「学習塾と運動経験」, 体育の科学, 38-8:587-591, 1988.
 - 9) 家本芳郎, 「『遊び』の教育力」, 体育科教育, 34-2:10-13, 1986.
 - 10) 稲村博, 小川捷之(編), 遊び, 現代の子どもを考える10, 第4版, 共立出版, 1985. Pp. 190.
 - 11) 磯貝芳郎, 「遊びの価値を見直そう」, 体育科教育, 30-1:6-8, 1982.
 - 12) 加賀谷淳子, 「幼少年期の生活とスポーツ」, 体育の科学, 30-2:548-553, 1980.
 - 13) 松浦義行, 「子どもの生活と運動不足」体育の科学, 30-2:96-100, 1980.
 - 14) NHK取材班, 子供からの赤信号, 日本放送出版協会, 1984. Pp. 240.
 - 15) 丹羽劭昭, 「なぜ, いま遊びの復権が必要か」, 体育科教育, 30-1:2-5, 1982.
 - 16) 丹羽劭昭 (編), 遊戯と運動文化, 道和書院, 1979. Pp. 382.
 - 17) 小川正通, 幼児教育原理, 第4版, 金子書房, 1967. Pp. 282.
 - 18) 岡本英明, 「競争心の発達と子どもの遊び」, 体育科教育, 30-1:12-14, 1982.
 - 19) 小野繁, 「『遊び』の指導と教師の役割」, 体育科教育, 34-2:25-27, 1986.
 - 20) ルソー, J. J., (今野一雄訳), エミール (上), 岩波書店, 1980. Pp. 405.
 - 21) ピアジェ, J., (大伴茂訳), 遊びの心理学, 黎明書房, 1988. Pp. 277.
 - 22) 柴谷久雄, 遊びによる人間形成, 黎明書房, 1973. Pp. 213.
 - 23) 汐見稔幸, 「『ファミコン』あそびを考える」, 体育の科学, 37-2:111-115, 1987.
 - 24) 藺田硯哉, 遊びの構造論, 不昧堂出版, 1983. Pp. 249.
 - 25) 吉澤昇 (他), ルソー著作と思想, 有斐閣, 1979. Pp. 242.
 - 26) 吉澤昇 (他), ルソーエミール入門, 有斐閣, 1980. Pp. 253.
 - 27) 辰巳敏夫, 教育心理学, 第2版, 学苑社, 1975. Pp. 193.
 - 28) 竹之下休蔵, プレイ・スポーツ・体育論, 大修館書店, 1973. Pp. 252.